



ネットが起業の後押しをした

京都に30年間暮らした私が、函館で出版社をつくりたのは2011年の秋でした。この年、大地震が東北地方を襲い、函館も被災しましたが、私の出版社立ち上げも震災と無関係ではありません。

それまでは函館と京都を往復しながら、函館で見つけた素材を基に本の企画を立てて、東京の出版社に売り込んでいました。しかし私の思う函館の魅力は理解してもらはず、「なぜ函館なのですか」という疑問詞とともに、却下、却下の連続でした。

それでも諦めたくはなかったのですぐ、地震は東北にあつた書籍用紙の工場にも打撃を与え（印刷所や輸送体制にも影響が出ました）、大量の発行部数を誇る「ミック誌」が発行困難に陥りました。懇意にしていました編集者からは、「われわれが予定し

地域における情報環境

困難の「ミック誌」が電子書籍でネット配信されたという話を聞きました。それで考え方方が変わったのです。

紙不足を乗り越える手段は電子書籍しかないだろ。印刷費の不要な電子書籍なり、資金力がなくても出版社がつくれる。出版の中心は東京だけ、ネットで売る電子書籍なら地方も東京も関係ない。そういう期待から、函館に腰を据えて出版に取り組んでみようと決心しました。メインは電子書籍のつもりでした。

ていた本も、紙不足で出せない状況だから、持ち込み企画が通る可能性はゼロに近い」と言われました。ちよつといこの「電子書籍元年」という言葉が飛び交っていました。電子書籍には懷疑的でしたが、発行

困難の「ミック誌」が電子書籍でネット配信されたという話を聞きました。それで考え方方が変わったのです。

紙不足を乗り越える手段は電子書籍しかないだろ。印刷費の不要な電子書籍なり、資金力がなくても出版社がつくれる。出版の中心は東京だけ、ネットで売る電子書籍なら地方も東京も関係ない。そういう期待から、函館に腰を据えて出版に取り組んでみようと決心しました。メインは電子書籍のつもりでした。

予定通り電子書籍でスタートしたものの、手応えはほとんどありません。PRしてもアクセス解析に反映されず、無料の試読ページには来てもらっても、有料購読のボタンを押してももらえないのです。ただ当時は函館のみならず、全国的に電子書籍は掛け声だけで実売には至らず、人気作家でも電子書籍の販売部数は3桁に達していました。

まあ売れないのはともかく、函館では電子書籍自体が知られていないのではないかという感触がありました。電子書籍をやっていきますと云つても、「ああ電子辞書ね」と返してくる人が少なからずいたものです。

私見ですが、それは通勤環境によるところも大きいのでしょうか。「電子書籍元年」と離されたころ、首都圏の駅には、電子書籍端末のポスターが連張りされていました。これだと電子書籍に興味のない人も、イヤでも目に入ります。

ソコンに親しむきっかけになる。スマート폰は電子書籍普及の力ギを握る端末ですから、これは励みになる一言でした。

通勤環境と情報格差

ソコンに親しむきっかけになる。スマート폰は電子書籍普及の力ギを握る端末ですから、これは励みになる一言でした。

市圏では、駅のポスター、車内の中吊りはもとより、電車のドア上に液晶画面が設置され、電子書籍に限りずどんどん新しい情報が流されています。情報が多くすぎるのも考え方ですが、このような通勤環境のある都市とそうでない地方とでは、情報収集量にどうして格差が生じてしまっています。



★プロフィール★

おおにし つよし
大西 剛さん

大阪出身。
2011年秋より、函館に移住。
「新はこだてライブラリ」を設立し、函館発の電子書籍・印刷書籍の出版に取り組む。
2012年には、2008年秋からの函館通いで感じた町の魅力を綴った「新函館写真紀行」を出版。
現在は、移住サポーターとしても活躍している。

電子書籍普及のため、自社出版物のほか地元放送局や市民団体の刊行物を電子化